

毎日が休業日

これで本当に大丈夫？ネパール経済

休暇一時帰国から帰ってきた私を待ちかまえていたのは、ネパールバンダ (ゼネスト) だった。下のリストを見て欲しい。8月から9月にかけて、ネパールではバンダばかりやっている。(出所: The Kathmandu Post, 1997年9月9日)

8月17日(日)	統一戦線(左翼系)他9政党	反テロリスト法反対
8月22日(金)	ネパール学生連合(左翼系)	反テロリスト法反対
8月29日(金)	統一戦線他10政党	反テロリスト法反対
9月8日(月)	ネパール商工会議所	付加価値税導入反対
9月17日(水)	ネパール商工会議所	付加価値税導入反対
9月18日(木)	左翼系4政党	反テロリスト法反対

カトマンズ研究センターの1994年調査では、1日バンダを行うと5千万ルピーの国民経済の損失を被るとのこと。これは1997年の物価水準では6千万ルピー、日本円で約1億2千万円の損失である。この国のマクロ経済の規模を考えると深刻な数字である。現政権のマオイスト(毛沢東主義者)対策として打ち出された反テロリスト法案に抗議する左翼政党のバンダなら政治絡みでまだわかりやすい。しかし、こうした道路封鎖や投石放火、どさくさ紛れの強盗騒ぎを伴うバンダを経済の損失とこれまで抗議してきた商工会議所が、政府が導入を検討している付加価値税反対で自ら休業するとは、もう開いた口が塞がらない。バンダの期間中官庁街は開いているが、車での外出が危ないため事務所から車で外へは出られない。

暦の上では8月中旬から乾季に入るが、乾季入りとともに祭日が急増する。8月18、19、25日、そして9月15日(月)、これらはヒンドゥー教の信仰に基づくもので、いずれも平日が祭日となる。祝日ではないけれど、9月には「ティーズ」と呼ばれる女性だけが会社を休める日があった。だが、バンダや祭日だけで、こんな記事を書いているわけではない。

9月11日、 kongress党のMatrika Prasad KOIRALA元首相が逝去し、翌12日(金)は全国民が喪に服するため休日となった。さらに9月18日早朝、1990年民主化運動の指導者Ganesh Man SINGHが逝去した。この日予定されていたバンダは午前11時で中止、翌19日(金)はまたまた休日になった。信じられない。日本で田中角栄元首相が亡くなった時、私達は服喪休日を取っただろうか。昭和天皇が崩御された時、国民の服喪休日なんてなかったと記憶している。大体、2名ともkongress党の重鎮なのに、左翼政党がなんでバンダを中止したり、服喪休日に同意したりするのだろうか。

お陰で、9月第3週の我が事務所は、15日(月)は祭日、17日(水)18日(木)はバンダで身動き取れず、19日(金)は官庁が休業となり、まともに仕事できたのは16日だけというとんでもない1週間となった。その国その国の風土文化は大切にせねばならないが、こんなに国民経済を犠牲にする国と国民に、協力支援しようなんて気がだんだんしなくなってきた。

チケットが取れないよ〜っ！

シャングリラへの遥かな道

美澄と樹生のカトマンズ到着が11月5日と決まった。本当は11月2日到着を希望して私の一時帰国中に行動開始したのだが、同便で美澄のご両親も来られるため、3人分の席を確保するのが至難の業で、結局これに最も近い11月5日を選んだという次第である。ビジネスクラスでこの状態だから、エコノミークラスは何をかいわんやである。

デザインが始まる10月上旬からがネパールの観光シーズン。今年もトレッキング目当ての観光客が大挙して訪れる。今からチケットを押さえるなんて奇跡に近い。JICAの調査団でもエコノミーのノーマルチケットを確保できず日程をずらすケースが起こりうる。ネパール行ってみようと思いついてももう遅い。ネパールへの渡航には長期的かつ計画的な準備が必要だ。

ホテルだって同じ。去年の11月初頭に来た障害者のミッションは、チケット押さえるのに手間取って、日程を固めた後で事務所にホテル予約の依頼を10月下旬にしてきたが、その時点で5つ星ホテルは全て満室だった。今年も、たった2部屋のブッキングすら難しいホテルが既に出てきている。クオリティにこだわらなければホテルはいくらでもあるのだけれど。

私はこのデザイン休暇を利用して、末弟の結婚式に出席するために日本に帰る。今回は全くの私費一時帰国なので、エコノミークラスを使う予定である。式の日取りが決まった今年3月の時点で既に行動を開始し、4月上旬には希望のフライトを既にブッキング完了していた。希望通りに日程を組むには、これだけ早くから行動せねばならないということだ。

因みに、美澄達と一緒に来られるご両親については、帰りのチケットだけカトマンズで取った方が約3万円の節約になるということで、私が8月に戻って来てすぐに航空会社にコンタクトしたけれど、希望の出発日でビジネスクラスを確保することはやはり困難だった。約1カ月待ってみて、これまで週5日しか運行していなかったタイ航空が10月26日から3カ月間毎日運行することを聞いた私は、ダメもとでこれまでなかった火曜日出発のタイ航空便が取れるかどうか試してみた。結果は大成功！席はあっさり取れた。ご両親のカトマンズ滞在は、11月5日～11日である。

「サンチャイ通信」ホームページ開設準備進行中！！(速報)

一時帰国中に購入したホームページ作成用ソフトのインストールを完了し、ただ今勉強中です。今秋中にサンチャイ通信をホームページ化して、バックナンバーをご覧頂けるようにしたいと思います。乞うご期待下さい！

この国をよりよく知るために

ネパール関連書籍の紹介

一時帰国中にネパールに関連する書籍をいくつか購入し、こちらに持ってきた。それ以前に読んでいた本もいくつかあるが、秋の夜長を過ごしていただくために、何冊か紹介してみたい。

「暮らしがわかるアジア読本：ネパール」石井溥編、河出書房新社、1997年

この本は、ネパールに来たことがある人でないとちょっと難解かもしれない。私達はこの国で長く住んでいるからすんなり頭に入って来るけれど、でも、裏を返せば、それだけこの本がネパールについて詳細に書かれているということだ。

「ネパール旅の雑学ノート」平尾和雄著、ダイヤモンド社、1996年

ポカラで「スルジェ館」という旅館を経営されている日本人が書かれた本である。書き下ろしでなく、いろいろな雑誌に寄稿された紀行文の寄せ集めで、肝心の「いつ」の部分が書かれていないので、時系列が判りづらく、私はかなり読みにくいとの印象を持った。ただ、イラストも多くて、お薦めの1冊であることには間違いない。

「ネパールからナマステ！」西野孝枝著、筑摩書房、1996年

日本工営の現地駐在員の奥様が書かれた本。これも書き下ろしでなく、西野さんが滞在中に日本の友人に宛てた手紙を編集したものである。これも「いつ」がはっきり述べられていないが、1993年夏の集中豪雨や冬のゴレパニ周遊トレッキング等、季節とマッチした話題が多く、非常に読みやすい。

「チベット旅行記1～5」河口慧海著、講談社学術文庫、1978年

東京本所の五百羅漢寺住職だった河口師が、仏教の原典を求めて1900年にヒマラヤを踏破してチベットに入るまでの紀行文。河口師はネパールに入国した最初の日本人で、この旅行記は現在でも一級のチベット研究文献と言われている。イラストが多くて語り口も面白く、英文に翻訳までされてカトマンズで手に入る。

「深夜特急1～6」沢木耕太郎著、新潮文庫、1994年

デリーからロンドンまで乗合バスで旅をする、26歳の著者の紀行文である。ネパール立寄りも雨季だったらしく、さらりとしか書かれていない。著者はカトマンズに芳しくない印象を持って去ったという感じを受けた。雨季明けとともに再び「下界」（インド）に降りている。ネパールの部分だけでなく、香港・マカオからスタートしてロンドンまでの全行程を味わってみるのがよい。読んでいて、私は、学生時代にしたグレイハウンドでの米国バス旅行を思い出し、懐かしさにかかられた。今の自分には守るものが多く、そんな勇気は全くないけれど。

「神々の山嶺（上）（下）」夢枕獯著、集英社、1997年

エベレスト南西壁冬期無酸素単独登頂に挑む男とそれを見届けるカメラマンの話。プロットがなかなか凝っていて、またかなりの現地取材をやったと思われる、著者の力の入れ方がよく伝わってくる。めっちゃめっちゃ面白くて、合計千頁近い2分冊を一気に読めた。登山の好きな方は読んでみられるとよい。「なぜ山に登るのか。」という言い古された質問に対して男は答える。「そこに自分がいるから。」印象に残った一言である。

「ネパール人の暮らしと政治」山本真弓著、中公新書、1993年

つい最近までカトマンズの日本大使館の調査員だった山本さんの著書。風刺笑劇から世相に切り込む視点が面白く（山本さんが他で書かれているレポートも面白いものが多い）、何度も読み返してはなるほど納得している。これも、一度ネパールに住んだ人にはお薦めできる1冊だと思う。

「ネパールの少女買春」ABC Nepal編、明石書店

「ネパールの働く子供たち」CWIN編、明石書店

この2冊を読むと、この国の暗部の深刻さ、悲惨さが嫌と言うほど見えてくる。子供を搾取する大人がいて、実態をつかみにくくしているのである。また、買春や児童労働を当たり前として教育の必要性を説く連中もいる。カトマンズに住んでいるとこうした場合に直面する機会が全くないのだ。カトマンズに住む人間こそ読むべき2冊であると強く感じる。

お礼もよく見て頂戴な

25ルピー紙幣新登場

一時帰国中の大きな出来事の1つに、25ルピー紙幣の登場がある。普段何気なく入っては出て行く紙幣であるが、じっくり見るとなかなか面白い。それは、この国の紙幣がなかなかカラフルで、動物が印刷されているからである。

額面金額が大きくなるにつれて、動物も大きくなってゆく。また、紙幣自体も大きくなり、1000ルピー紙幣などは日本の札入れではちょっと苦しいくらいである。色も金種によって異なる。米ドル紙幣等と比べればはるかに特徴的であるのは、私が思うに、この国の識字率の低さに理由があるように思う。券面の数ではなく、紙幣のイメージで金額を覚えさせようということなのだろう。

25ルピー紙幣が登場したからといって、買い物をする時の紙幣の出し方が変わったわけでもない。私が想像するには、今まで20ルピーでも買えたモノやサービスが、25ルピーに値上がりする可能性はあると思う。ネパール人はおつりを持っていないから、1枚の紙幣きっかりの金額を請求してくる（例えばタクシーが100ルピー、200ルピーとか）。いずれにせよ、財布を持っていない人が多く、汚れた手を経てポロポロになった小額紙幣が多い中で、25ルピーのピン札の登場は新鮮な気持ちにさせてくれる。

全ての紙幣に印刷されているマヘンドラ国王だが、今回発行された25ルピー紙幣の国王は、ちょっと老けた感じがする。なかなかリアルである。

額面金額	印刷されている動物
1ルピー	アマダブラム山麓のシカ
2ルピー	タライの草原を歩くヒョウ
5ルピー	メルンツェ（？）山麓のヤク
10ルピー	タライ平原のシカ
20ルピー	タライ平原のオオツノシカ
25ルピー	マチャチャルを背景にたたずむ牛
50ルピー	ヒマラ（山名不明）山麓の山羊
100ルピー	タライ平原のサイ
500ルピー	水辺にたたずむトラ
1000ルピー	タライ平原のインド象

JICA事務所には、「自分をJICAの事務所やプロジェクトで雇って欲しい。」と飛び込みで来るネパール人が時々いる。「息子を雇って欲しい。」と言ってきた母上殿もいて、世の母親はかくも強きかなと驚嘆したケースもあった。

先日、事務所に「調査の仕事させてくれ。」というネパール人からの電話があった。受付嬢が私に繋いでしまったため、私は毎度のことと適当にあしらおうとした。「今のところ調査の予定などない。取り敢えずあんたの名前をうちのコンサルタントのリストに掲載しておくからそれでいいだろう。」ところが、このお方、どうしても一度事務所に来たいと言う。

仕方なく、別途時間を決めて、このお兄さんに来てみた。彼曰く、自分はバンコクのアジア工科大学で修士号を取得して1ヵ月前に帰ってきた。指導教授はJICAから派遣されていた日本人専門家だった。この専門家が、「もしカトマンズのJICA事務所で仕事を受ける時に推薦状が必要だと言われたら、これを使え。」と言って、自分に推薦状を持たせてくれた。自分は地方水道局の職員だが、JICAで調査の仕事を得られれば、有休取得してそれにちゃんと専念する、云々。

「ネパールの公務員法では、アルバイトできることになってるの?」「それは大丈夫だ。有給休暇中の行動についての規制はない。」もう彼は自信満々だ。でも、話を聞いているうちに次第にボロが出てきた。

彼は帰国後の人事異動発令で、エベレスト街道沿いのコタン郡の水道事務所へ異動の辞令を受けた。そんな所へ行ったら、折角自分が大学で身につけた調査手法を実践する間もなく忘れてしまう。どうせ有休は貯めてあるから、ここでまとめて使い、1年くらい別のアルバイトをやろう。コタン水道事務所の空席は、他の誰かの補充があるだろうから大丈夫だ。

この国の公務員の年間有給休暇数は30日、その他病気休暇等を合わせると年間48日休みを取ることができる。しかも、日本と違って繰越がいくらでもできる。だから、有休を貯めておいて、地方への異動を命ぜられるとすぐにその有休を取得して地方へも赴かず、カトマンズ周辺でアルバイトする。特に問題になるのは、医療事情の劣悪な僻地へ赴任してくれる医者がないことである。ネパールの役人は殆ど例外なくカトマンズを向いて仕事をしている。

そんな下心がみえみえだったこのお兄さん、本当は「お前みたいな奴がいるから、この国の地方開発はおぼつかないんだ!」と一喝してたたき帰したかったのだが、そこは大人の山田所員、「申し訳ないけど、今あなたに与えられる調査の仕事はない。それにあなたが自分の水道開発手法をこの国に生かしたいのであれば、地方水道局の上司を説得して、研究と手法実践にお金を付けてもらう方が現実的なのではないか。それが国家的計画として認知されれば、JICAも支援しやすくなるし。」と柔らかく説明して、45分にもわたる彼の直談判を打ち切った。

焦る気持ちはわからぬでもないが、世の中やりたいことだけやって生きれる奴なんて、それほどいないんだよ。

スペアパーツは置いてない

ネパールの日本車オーナー奮闘す

私の任期もまる2年を間もなく迎える。愛車カローラセレスがカトマンズに登場してから1年半になる。12,000kmで購入した中古車だったが、今では走行距離40,000km弱に達した。信頼性の高い日本車ではあるが、ネパールの荒れた路面はポディローのように効いてきて、登場1周年を迎えた辺りからボロが出始めた。

1. ブレーキランプ球切れ

私のセレスがカトマンズに登場して以来、セレスの台数は確実に増えた。だからブレーキランプの球が切れた時、トヨタのディーラーに行けば電球くらい置いてあるだろうと思った。しかし、彼等の反応は「こんな車、カトマンズで走っているのか?」仕方なく、私は三鷹の義父より電球を何個か郵送してもらうことにした。電球交換は自分で行なった。

2. バンク

今年3月に初めてバンクを経験した。1年以上乗っているから、タイヤが摩耗していたのは事実で、そろそろ替え時かなと思った。しかし、美澄が市中探した挙句、結局同じサイズのタイヤが見つからず、仕方なく半径1cm程大きいインドネシア製ブリジストンタイヤで妥協することに。このタイヤも、以後一度バンクを経験している。

3. ショックアブソーバー

左前輪のサスペンションのパーツから、油漏れが見つかった。ショックアブソーバーは円筒形の筒の中にサスペンションコイルと潤滑油が入っており、この油が漏れ出すとスプリングだけでサスペンションが効いていることになる。走っていても「キーコキーコ」と音がする。すぐに交換する必要はないと某専門家からアドバイスは受けたが、念のためと今回の休暇一時帰国時にスペアを買って手荷物で運んできた。このパーツ、空港のX線探知器を通すとなんと機関銃のような画像が映り、空港職員に中を調べられて大変だった(でもネパールの税関はいちばんいい加減だったので助かった)。

4. オイルクリーナー、エアクリーナー

これらパーツは、赴任時に持ってきていた。こちらは1年毎に警察の排ガス検査を受け、合格して緑のステッカーをフロントガラスに貼ってないとカトマンズ市内を走ることが許されないが、9月に再検査を受けるに当たり、クリシュナがエンジン関係のパーツは新しいのと交換しておいた方がいいと主張したため、スペアパーツを全部使用した。この排ガス検査はかなり厳しいらしく、一発合格するためには整備工場に一度持って行った方がいいそうだ。来年のこれらのパーツ交換は、私の後任に負担してもらおうと密かに目論んでいる。

5. オーディオ

今年4月くらいから、カーオーディオが聴けなくなっている。メインパネルは正常に作動しているが、スピーカーから音が出ないのである。ヒューズを調べたがどこにも異常はない。ただ1つ考えられるのは、メインパネルからスピーカーに繋がっている配線のどこかを、ネズミに噛られたことだ。わが家の自家発電機の配線も噛み切られたし、実際に発電機の中にネズミが住んでいるのも目撃した。セレスのエンジンルームにネズミの糞が落ちているのを見たこともある。

こんないろいろなトラブルが起きるのに、カトマンズのトヨタディーラーは全くあてにならない。スペアパーツもろくに置いていないし、輸入するのに半年近くかかる。いちばんいいのは、予めスペアパーツは準備しておくこと、そして日本で最良のディーラーを確保しておいて、すぐにスペアパーツの調達ができることだ。

以前も紹介したネパール基礎初等教育プロジェクト (BPEP) は、1998年1月から第2フェーズに入る。過去3年間わが国はBPEPの小学校建設コンポーネントに無償資金協力を行ってきた。第1フェーズでは世銀、ユニセフ、DANIDA (デンマークの援助実施機関) と日本でBPEPを支援してきたが、第2フェーズから新たにEC、FINNIDA (フィンランド)、NORAD (ノルウェー) が支援を表明しており、7つの援助機関 (ドナー) 連携の大型プロジェクトとなる。第2フェーズに向けた準備会合には、今年年明けから私も適宜出席し、つたない英語力ながらいろいろ発言し、より良い実施計画策定のためにBPEPに協力してきたつもりだ。その一方で、他のドナーとの援助実施体制の違い、JICAの組織の未熟さを痛感させられている。

【担当者のレベルが違い過ぎる！】

世銀やユニセフの現地事務所の教育セクター担当者は、教育学の学位を取得した専門家である。他のドナーは本国から担当者を送り込んでくるが、その道のプロのコンサルタントが多い。かたやJICAは、事務所員が4、5セクターを掛け持ちしており、教育セクターだけを集中的に見るのは難しいし、教育の専門でもない。自ずと議論の深みに差が出てくる。

【担当者はそのドナーの代表でなくてはならない】

ドナー合同のミッションとなると、他のドナーは本国から担当者が必ず出張してくる。また、必ず同一人物が担当しており、それなりの権限を持ってやって来る。かたやJICAは、事務所員が出席せざるを得ないから、私が異動になったらまた新しい所員がゼロからまた勉強し直しという事態が予想される。また、所員レベルで対応しているから、所員の発言を本当にJICA本部がサポートしてくれるかどうか保証が全くない。実際に、今はサポート体制が整備されていない。

先日、初等教育分野のプロジェクト形成調査団を本部は派遣してきたが、この調査団はドナー会議に出席していながら私の発言については「調査団の責任範囲外」として他人事のような態度を取った。私の意見はJICAの意見、JICAの意見は、たとえ調査団が発言を控えたとしても、本部から来ている調査団の意見として解釈される。それをわかって欲しかった。

【調査団が現地ですべきこと】

欧米の調査団は、調査団の現地滞在中にエイドメモワール (覚書) を作成し、先方政府に手渡す。それは難しくても、少なくとも現地調査報告書は提出して帰国する。だから、団員は最後の2、3日はホテルに缶詰状態で報告書作成に精を出す。JICAの調査団は、新規案件の実施合意文書の場合を除けば、たいていは事務所に和文の現地報告書を提出するだけで相手国政府に英文の報告書を提出することはない。報告書取りまとめは、帰国後の国内作業にかかっているため、ひどい時は帰国から半年以上かかって和文の報告書だけが完成するというケースがある。

【報告書は英文で作成すべき】

BPEPで凄むと思うのは、教育省も他ドナーも、調査レポートの数が非常に多くて、お互いに情報を提供し、共有しようという積極的姿勢が見られることだ。これは、ネパールの他の経済協力案件では殆ど見られない。この点でもJICAは出遅れている。相手から情報をもらえばっかりで、提供できる情報は極めて少ないのである。これは担当者である私の力不足もあるが、担当者が独自で調査をかけることは時間的予算的に無理だし、日本から来る調査団も英文の報告書をなかなか残してくれないので、調査団を応対した先方政府や他ドナーに対して、何等フィードバックができない状況なのである。

【総額ブレッジ方式の採用も考えてみては？】

BPEPを支援するドナーのうち、JICAを除く他の6者は、第2フェーズ5年間に総額いくらを供与するかを明言できる。JICA及び日本政府は、単年度予算主義という制約があり5年間の協力継続を金額的に明示することができない。従って、毎回ドナー会議に出る度に、「うちはいくらコミット (供与確約) したから、お前んととも早くコミットしろ。」とプレッシャーをかけられ、私は現在の日本のODAスキームの制約を説明している。我々の場合、金額明示をする以前に、5年間の協力確約をする手段自体が極めて限られている。「日本は直接資金供与ができないのに、なんで対ネパールODA金額第1位なんだろう。」との疑問も湧く (理由はなんとなく想像がついているのだが、これ以上のことはふれないでおきたい)。

日本のODAは、相手国政府の金庫にお金が直接入らない仕組みになっている。無償資金協力もお金が相手に直接振り込まれることはない。これは、相手国政府の資金不正流用を避ける意味では確かにメリットが大きい。でも、今後この手のマルチバイ協力 (或いは複数ドナー連携協力) を実施してゆく上では、大きな制約になるのは事実だと思う。

他のドナーと協力して何かをやる場合、こちらの事情を相手に説明することと同時に、相手を理解して歩み寄ることも必要だと思う。もしネパールでの任期を終えて日本に帰る時が来たら、こうした現場の事情に十分配慮し、できる限りのサポート体制を本部の中に作ってゆきたいと強く思っている。

HIMNET-FAXで、ちょっぴり日本が近くなる

最近、インターネット電話で国際電話FAXを送れるサービスがカトマンズで始まった。国際電話は通常1分間120ルピー (約240円) だが、このサービスだと40ルピーでFAX送信ができ、約65%の経費節減効果がある。年間利用料4000ルピーが別途取られるので、月平均5回以上FAXを日本に送れば元が取れる計算だ。うちの事務所は本部とのFAXのやりとりが多いから、個人で使ってみて良ければ事務所にも導入しようと考え、先ず自分で加入することにした。サンチャイ通信のFAX送信サービスもこれで心置きなく行うことができる。この国は電力供給が不安定で、我が家では電子メール用モデムを既に2台壊している。その度に美澄とのやりとりはFAXに移行するので、このサービスは大助かりである。

編集を終えて・・・

★9月は時の経つのが非常に遅く感じました。私不在の間にも、樹生君はすくすく育っている様子で、美澄からの電子メールを見る度に、その場にいられない自分が悲しくなる始末でした。10月は末弟の結婚式で一時帰国するため、単身赴任の生活は残すところあと1カ月です。再来月以降のサンチャイ通信が樹生君の話題でいっぱいになることを見越し、今月と来月はこれまでに書き漏らした話題をいくつかお届けしたいと考えて編集いたしました。 (浩司)